第4章

直江広治——民俗学への熱意

一九三九年三、四月に、東京文理科大学史学科教授有高巌の引率の下で、東洋史専攻十数名の学生が新潟から船に乗り、朝鮮の元山港を経て渤海、ハルピン、熱河、北京、天津、大連などを見学旅行した。学生の中に当時大学二年生の直江広治もいた。現地解散後、彼は一人で平壌、ソウル、慶州を経て、釜山から帰国した(1)。これは彼の初めての中国経験であった。

直江広治は前年の深秋に高師の同級生千葉徳爾と柳田宅を訪れ、その後指導を受けたこともあるが、正式に民間伝承の会に入会したのはこの大陸旅行から戻ってきてからのことであった(『民間伝承』四-九、一九三九年六月号)。同期に入会した者には台湾の金関丈夫(2)もおり、同号の『民間伝承』には倉田一郎による太田陸郎の「中支奥地の鵜飼」の紹介や、大連の守随一による「突工挿具」に関する通信が載せられ、日本民俗学者の中国での活躍は始まっていた。

直江広治は、戦前から木曜会に参加し、柳田の弟子となり、戦後も、民俗学研究所の運営や東京教育大学、筑波

大学での教育活動を通して日本民俗学の発展に深く関わった人物である。とくに「八月十五夜考」などに代表されるような「比較民俗学」の提唱は、民俗学者の中で異色とされている。

直江については、有馬真喜子のインタビュー記録「直江広治氏―筑波大学教授（ひと）」（一九七九年）(3)、北見俊夫の整理「直江広治先生と民俗学」（一九八二年）(4)などの先行研究があるが、いずれも直江の民俗学への貢献を、もっぱら戦後の研究や活動をもって高く評価している。戦前の活動については、本人の回顧「あとがき―民俗学と私」（一九八七年六月）(5)、「柳田先生の思い出―民俗学研究所を中心として」（一九九四年）(6)などから一部窺うことができ、最近、鶴見太郎は柳田国男古稀記念会との関連で直江の活動の一部を取り上げている(7)。なお、直江の中国関係研究の多くは『中国の民俗学』（岩崎美術社、一九六七年）に収録されている。

本章では、以上の先行研究を参考にしながら、まず彼の民俗学や中国との出会い、日本民俗学確立期に受けた訓練を辿り、それから中国に赴いてからの様々な活動を検討し、日本民俗学にとってのそれらの活動の意味を考える。

1　東洋史と民俗学

1　直江広治（なおえ・ひろじ）の略歴

一九一七年、青森県八戸市類家に生れる。東京府立三中（現両国高校）で正木助次郎の影響を受け、地理に興味を持つ。

一九三五年、東京高等師範学校文科第四部「地歴科」に入学する。自然地理から人文地理へ。佐々木彦一郎の研究に惹かれる。

一九三六年冬、「山の人生」で民俗学にふれ、これより柳田の著作を多く読む。